



Doshisha University Center for Baby Science

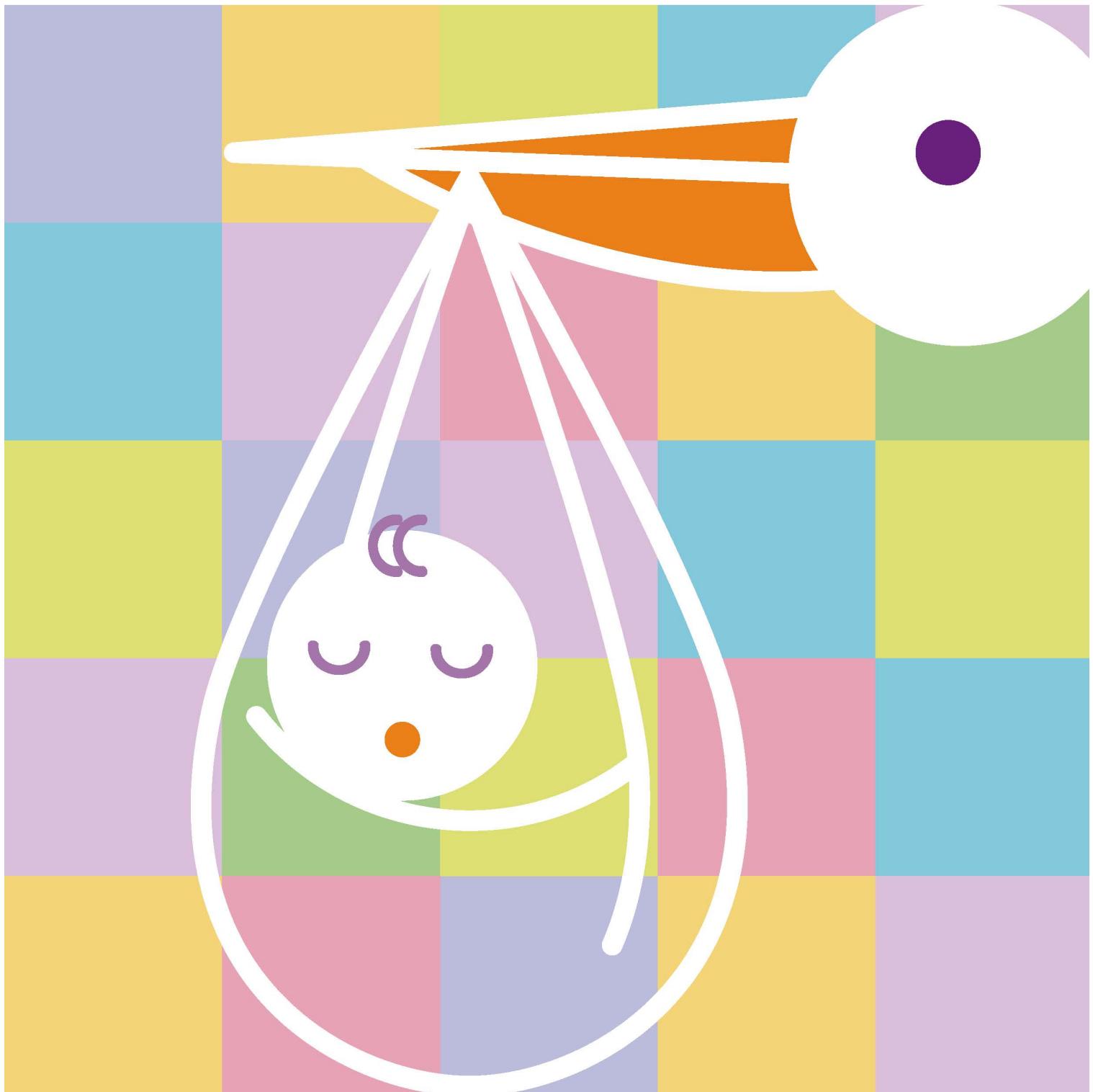
2017

BABLAB

No. 1

BABLAB

はじまりは 赤ちゃんから



文部科学省 共同利用・共同研究拠点 「赤ちゃん学研究拠点」
同志社大学 赤ちゃん学研究センター



01

- 02 創刊によせて | 小西行郎 |
- 03 赤ちゃん学研究センターのあゆみ
- 05 文部科学省 共同利用・共同研究拠点「赤ちゃん学研究拠点」赤ちゃん学研究センター
赤ちゃん学への期待
- 06 「赤ちゃん学」に期待すること | 紺野美沙子 |
- 07 赤ちゃん学の未来 | 秋田喜代美 |
- 08 私と赤ちゃん学 | 板倉昭二 |
- 09 AIのAは赤ちゃんのA? | 浅田 稔 |
- 10 看護学からの期待 | 岡山寧子 |
- 赤ちゃんコラム
- 11 「赤ちゃん」をめぐる語義について | 佐々木保行 |
- 研究プロジェクト紹介
- 12 研究プロジェクト一覧
- 13 胎児期からのハイリスク児の臨床観察による発達障害理解と包括的診断法構築 | 小西行郎 |
- 15 当事者研究による発達障害原理の内部観測理論構築とその治療的意義 | 加藤正晴 |
- 17 『機能リズム障害としての自閉症』仮説検証 | 松田佳尚 |
- 19 保育室内的騒音環境が乳幼児の聴覚情報処理の発達に及ぼす影響 | 嶋田容子 |
- 21 リサーチコンプレックス推進プログラム | 加藤正晴 |
- 23 自閉スペクトラム症の原因究明に向けたオープンシステムサイエンス:理化学研究所 小西ユニット始動 | 高野裕治 |
- 25 子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査) | 川西康之・小西かおり |
- 企業との連携
- 27 アップリカ／アートチャイルドケア(ACC)
- 研究レポート
- 29 赤ちゃんの人見知り | 松田佳尚 |
- 30 リーチングに表れるこころ | 高野裕治 |
- 31 赤ちゃんとお医者さん | 渡部基信 |
- 32 赤ちゃん・子どものひとりごと研究 | 嶋田容子 |
- 計画共同研究紹介
- 33 第1期採択課題
- 34 第2期採択課題
- 2016年度イベント報告
- 35 日本赤ちゃん学会 第16回学術集会
- 37 共同利用・共同研究拠点キックオフシンポジウム
- 38 定期セミナー
- 39 赤ちゃん学講座
- 40 赤ちゃん学カフェ
- 41 エコチルカフェ＆エコチルフェスタ
- 42 赤ちゃん調査メッセージ
- お知らせ
- 44 赤ちゃん研究員募集／共同研究公募
- 45 紀要原稿規定
- 46 編集後記



2017

BABLAB

BABL

創刊によせて



赤ちゃんに結び合わされる「学」をつくる

赤ちゃん学研究センター センター長／教授 小西 行郎

私たちのセンターの名称は赤ちゃん研究センターではなく、赤ちゃん学研究センターです。 「学」の一字があるか、ないか…で、意味が全く変わってきます。赤ちゃん研究をしているところは世界中にあります。ところが「学」をつけているところは少ないのです。私はこの一文字にこだわりを持っています。それは近い将来、赤ちゃんに興味を持つさまざまな人たちの思いを結集して、新しい学問としての〈赤ちゃん学〉をつくりたいと考えているからなのです。もちろんここに集う人たちは基礎研究者に限るつもりはありませんし、彼らが中心であるとも思っていません。ヒトの始まりとしての“赤ちゃん”に関心を持つすべての人々が集い、“赤ちゃん”について意見を交換し、それぞれの立場を尊重しあいながら討論する中で、ヒトができるがる仕組みを明らかにしてゆきたいと考えています。

日本赤ちゃん学会が生まれてほぼ20年近くたちましたが、まだまだ赤ちゃん学という学問領域が完成したように思えません。このたび、赤ちゃん学研究センターが同志社大学の中だけではなく文部科学省からも認められ、大学の共同利用・共同研究拠点に認定されたのは、そういう意味において極めて重要なことであると思っています。〈赤ちゃん学〉という言葉と、その研究をつなぐ「場」としての研究センターが公式に認められたのですから。

同志社大学にプロジェクトとしての赤ちゃん学研究センターが設置された2008年10月、私を入れて4人だった仲間が、9年経った今は30名近くに増え、名札を使わないと混乱が生ずるようになってしまった。その間、環境省のエコチル調査、文部科学省の新学術領域研究、JSTのRC事業などの大きいプロジェクトに採択され、メンバーとして参加することでさらに仲間が増え、また新しく理化学研究所とともに発達障害研究を中心として活動することが決まるなど、9年前には予想もしなかった展開になりました。企業との共同研究や協働事業なども徐々に増え、センターの立地する周辺の行政とも協力して研究調査や赤ちゃん学の啓蒙を進めています。また何より、たくさんの赤ちゃんたちの協力を得ることで研究成果をあげてきました。このセンターに足を運んでくださったお母さんと赤ちゃんたちに心からの感謝を伝えたい、そして研究の成果をご報告したい。こうした思いから、この紀要『BABLAB』が誕生しました。

この紀要是、ここに集い働く研究者やスタッフたちが、赤ちゃんや赤ちゃん研究への思いを広く社会に問い合わせ、社会からの様々な意見に向き合い、活動をさらに向上させるための意見交換の場にしたいと思っています。紀要をお読みになったみなさまからの忌憚のないご意見をお待ちしています。そしてどうぞ一緒に〈赤ちゃん学〉をつくってまいりましょう！

BABL



02

あゆみ
赤ちゃん学
研究センターの



うぶ声から 小さな一步へ

『赤ちゃん学』の“赤ちゃん”は、「ヒトのはじまり」を象徴しています。

赤ちゃんを見ていると、わきめもふらず、どんどん前進していきます。ヒトはそうやって、根拠のない自信に満ち、失敗すら笑いに変えながら、あるときふっと何かができるようになったり、何かに届くようになったりするような力を、「はじまり」の時代に持っていたのですね。

そんな赤ちゃんをみならって“赤ちゃん学研究センター”もどんどん前進したいところですが、少しだけ「はじまり」をふり返ってみましょう。

『赤ちゃん学』がうぶ声をあげたのは2000年。

赤ちゃん学会が設立されました。

ヒトのはじまりについては、これだけ科学が進展していく中意外なほどわかっていないことが多く、胎児はもちろん、赤ちゃんの発達についても、あまりに複雑すぎて、追いついていないのが現状です。それでも少しずつ、研究によってわかってきたことを、ものいえぬ赤ちゃん、子どもたちの代わりに世の中に伝えようと、『赤ちゃん学』は社会との架け橋を作る、ということを学会設立の当初に掲げました。もうひとつの架け橋は、研究者同士、さらには異分野の研究との架け橋でした。その後、人々と「ヒトのはじまり」としての赤ちゃんを研究する各分野の専門家たちが集まり、議論し、情報を共有しながら『赤ちゃん学』の二つの架け橋を築いています。

現在、赤ちゃん学研究センターのセンター長である小西行郎先生は、当初は事務局長、そして2005年から理事長としてその流れを作っていました。小児神経を専門とする小児科医ですが、2001年に東京女子医科大学に企業の寄付により“乳児行動発達学講座”を開き、小児科医、産婦人科医、理学療法士、認知心理学者などを集め、赤ちゃん学研究の見本を示していました。この講座が、今の同志社大学赤ちゃん学研究センターの前身です。

2006年には秋篠宮殿下をお迎えして国際赤ちゃん学会を京都のウェスティンホテルで開催し、順風満帆、さあこれから…と思っていたところに、寄付契約が満期を迎えていました。そこで次の寄付を募り、同志社大学に小さな寄付教育研究プロジェクトのひとつとして“赤ちゃん学研究センター”を設置することができました。

2008年10月、関西に移動した4人による新たなスタートでした。



まだまだ知られていない『赤ちゃん学』をどうやってわかつてもらおう…と手探りで、あっちこっちにぶつかつていったその頃は、ハイハイからタッチへ、の時期だったように思います。

2009年の秋には、京都府、木津川市、精華町、京田辺市とともに「赤ちゃんにやさしい都市(まち)づくりフォーラム」をけいはんなプラザで開催し、1,300名の赤ちゃんをともなったご家族が集まり、そのイベントは、2010年、2011年と開催され、地域との連携を深めるきっかけとなりました。その後は『赤ちゃん学』を学ぶ講座に形を変えて毎年開催しています。



2009 赤ちゃんにやさしい都市(まち)づくりフォーラム(けいはんなプラザ)



2010 赤ちゃんにやさしい都市(まち)づくりフォーラム(けいはんなプラザ)

2010年に環境省が公募したエコチル調査(子どもの健康と環境に関する全国調査)のユニットセンターに京都大学の医学研究科とともに手を挙げ、京都ユニットセンターとして採択されたことは、その後を支える屋台骨ができたことになります。

2012年、文科省の科学研究費補助金の中でも大きな研究費にあたる「新学術領域研究」に採択され、赤ちゃん学らしく領域を越えたネットワークが広がり、多くの研究者が赤ちゃん学研究センターに集うようになりました。
そして。

2015年、それまで寄付研究プロジェクト名だった“赤ちゃん学研究センター”が、大学の先端的教育研究拠点である“赤ちゃん学研究センター”として認められました。でも同時にひとつの大きなミッションが与えられました。文部科学省の“共同利用・共同研究拠点”的認定をとる、という。



2014 近鉄文化サロン(あべのハルカス)



2016 花見(けいはんな記念公園)



赤ちゃん調査の様子(センター内視線計測室)

BABLAB



04

準備のために学内の先生方の協力を得ながら会議を重ねたその年は、思えば、ハイハイからタッチへ、そしてアンヨに向かう大きな節目の1年でした。

一回でとることなど不可能に近いと言われながら、女神がほほえんでくださり、晴れて2016年4月、文科省の認定をいただくことができ、頼りないながら小さな一步が踏み出せました。

アンヨは…まだまだおぼつかないです。

でもたくさんの方々に支えられています。

研究にご協力くださる赤ちゃん、こどもたち、お母さん、お父さん、そのご家族。

研究を共にしてくださる研究者、研究機関、企業のみなさん。その成果を広げるためにご協力くださっている自治体、企業のみなさん。

『赤ちゃん学』を架け橋に…といいながら、どうやらその橋に助けられているのが“赤ちゃん学研究センター”的ようです。

たしかな足取りで「ヒトのはじまり」を支えられるようになるため、これからまた前に向かって歩んでいきます。赤ちゃんのように。

(文責:赤ちゃん学研究センター赤ちゃん学コーディネーター小野恭子)

文部科学省 共同利用・共同研究拠点 「赤ちゃん学研究拠点」赤ちゃん学研究センター

赤ちゃん学研究センター 特任准教授 松田佳尚

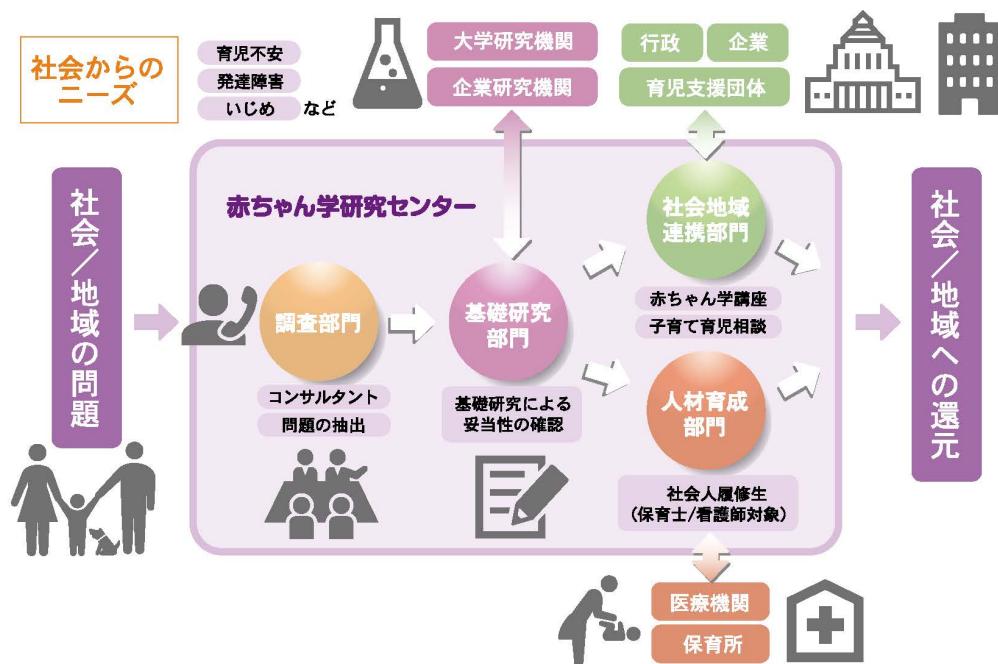
赤ちゃん学研究センターは2016年4月に、文部科学省「共同利用・共同研究拠点」に認定されました。「拠点」とは、個々の大学の枠を越えて大型の研究設備や大量の資料・データ等を全国の研究者が共同で利用、共同で研究を行える場所のことです。認定を受け、赤ちゃん学研究センターは赤ちゃんに関わる全国の基礎や臨床の研究者、保育現場で働く人達が集まれる拠点となりました。共に議論し、協力して研究を進めることで、その成果を現場や地域に還元するシステムを目指しています(図1)。赤ちゃん学研究センターには赤ちゃんの「こころとからだ」の発達を調べるために、たくさんの設備が揃っています。お母さん・お父さん、地域の人達向けの「赤ちゃん学カフェ」や、専門家向けの「定期セミナー」も行っています。赤ちゃん研究のために、たくさんの赤ちゃんが毎日きてくれています。赤ちゃんが自ら動き、自ら考え、自ら発達していく様子を、養育者の方、保育現場の方、研究者の方達と改めて考えていく、子ども達の将来を皆で考える。そのような赤ちゃん学研究拠点としていきたいと思います。



赤ちゃん学研究拠点

(図1)

ヒトの始まりから生涯にわたる「こころとからだ」の発達メカニズムの解明



* 赤ちゃん学への期待 *

「赤ちゃん学」に期待すること

女 優

紺野美沙子



| Profile |

東京生まれ。1980年、慶應義塾大学在学中にNHK連続テレビ小説「虹を織る」のヒロイン役で人気を博す。テレビ・映画・舞台で活躍する一方、1998年、国連開発計画親善大使の任命を受け、国際協力の分野でも活動中。2010年秋から、「甜野美沙子の朗読座」を主宰。様々なジャンルのアートと朗読を組み合わせたパフォーマンスを全国各地で公演している。

「赤ちゃん学」との出会いは、2年前にパネリストとして参加させていただいた「赤ちゃん学『眠育』シンポジウム」でした。初めて「赤ちゃん学」という学問があることを知り、私が子育てをしている時代にはなかった言葉だなあと、とても新鮮に感じました。シンポジウムのテーマ「生きる力をはぐくむ子どもの睡眠」での各専門分野の先生方のご発言はまさに「寝る子は育つ」を科学する、という印象。自分が新米ママだった頃、我が子の夜泣きに悩まされたことも懐かしく思い出されました。

私にとって初めての育児は、母になった喜びと同時に、これからこの小さな命を無事に育てられるのかという大きな不安が常にありました。困ったときには、母や姉、友人の先輩ママや公園で知り合ったママ友に相談し、ほっとしたり、より不安になったり。子育てには正解がないことは分かっていても、何を信じて良いかわからず、迷うことも多々ありました。

ネット社会で溢れる情報を容易に手に入れることができる現代では、新米パパママの迷いはより増えているのではないでしょうか。例えば「夜泣き」という言葉を検索すると、ネット上にはさまざまな情報があります。多くの情報を得られることはメリットではあるのですが、何が正しい情報なのか、どの情報が自分のケースにふさわしいのか、正しく選別することはとても難しいことです。中には不安をあおるものもあります。かつて私も自信を持てずにいるとき、そのような情報に影響を受けることがあり、それが余計な心配に繋がり、育児への不安が募ることもありました。

核家族化、更に少子化が進むこの時代、相談できる親や親せきは遠くに離れ、友人にも相談できず、一人で赤ちゃんと向き合い、悩み迷うお母さんたちも多いことでしょう。あるいは、赤ちゃんを保育園に預け、日々の仕事に追われ、育児にゆっくり向き合う時間すらないお母さんもいらっしゃると思います。女性の社会進出に伴い、0歳児を受け入れる保育園はもはや珍しくありません。シングルマザーやシングルファザーなどさまざまな立場の方もいらっしゃいます。子育てに迷う新米パパママはもちろん、孫育て中のジイジやバアバ、そして保育に関わる全ての人々が、赤ちゃんの正しい情報を必要としているのではないでしょうか。

「赤ちゃん学」には、正しい情報をわかりやすく伝える役割を担ってほしい、情報を必要とする人たちに、学説に基づいた信頼できる情報を届ける太い幹のような存在になってほしいと思います。そして、百人の赤ちゃんには百通りの育て方があることを伝え、単に頭のいい子どもを育てるためではなく、豊かな人生を歩む子どもを育てるための学問でありますように。

「赤ちゃん」は「ヒトのはじまり(起源)」、つまり赤ちゃんを知ることは、ヒトを知ること。赤ちゃんのメカニズムが、最近よく耳にする「人工知能」に繋がるということを聞き、新たにこの学問が未来に向かう無限の可能性を感じています。まだまだ解明されていないことが多いこの分野で、さまざまな専門家・研究者が協力し、どのような赤ちゃんのサインを私たちに届けてくださるのか、とても楽しみです。「赤ちゃん学」の益々の発展を期待しています。

BABLAB



06

赤ちゃん学の未来

東京大学大学院 教育学研究科 教授
東京大学大学院 教育学研究科附属
発達保育実践政策学センター センター長

秋田喜代美



| Profile |

東京大学大学院教育学研究科博士課程単位取得退学。博士(教育学)。東京大学教育学部助手、立教大学助教授を経て1999年より東京大学勤務。専門は、保育学、教育心理学。主な著書に『保育の心意気』(ひかりのくに)『あらゆる学問は保育につながる』『保育学講座第1巻 保育学とは』(東京大学出版会など)。



学 術雑誌BABLABが同志社大学赤ちゃん学研究センターから刊行されることになった。これは、赤ちゃん学が学として新たな学術の知を社会に発信をしていく点で、エポックメイキングなことである。紀要が定期的に刊行できることは、何を意味するか。それはまず、それだけの論文の書き手とその人たちが生み出した研究がセンター内に生まれているという証である。そしてさらに、センターの中にとどまらず、さまざまな人々が赤ちゃん学研究センターを核にしてネットワークを創り、読み手として、また書き手としてつながってきていることの証拠でもある。こうした赤ちゃんの研究を中心として、多様な学術がつながっていき、その輪が全国的に広がることが、これから大いに期待できる。

世の中では、少子化の中でも待機児童対策や保育士不足、そして地域子育て支援をはじめ、子育てに関して多くの政策的マナーの議論が報道されている。しかしそうした声の根底になければならないのは、赤ちゃんが赤ちゃんとして世に生を受け誕生していくメカニズム、誕生から発達していくメカニズム、そしてそれを支える養育者や養育環境の在り方である。これらはまだまだ分かっていないことが多い。神経発達科学や小児医学、発達心理学、保育学を始め、多様な学際的分野が今赤ちゃんに目を向けている。また多様な電子化技術の革新と急激な進展によって、24時間、赤ちゃんの様々な行動は、目に見えない部分まで個体、環境の在り方を記録し解析することができるようになってきている。そうした技術革新の中での赤ちゃん学をリードされているのは、同志社大学の赤ちゃん学研究センターである。また一方で赤ちゃんから幼児期そしてその後の人生へという視点で、2015年7月には、東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターも誕生した。赤ちゃんに関する研究をしているさまざまな大学やそのセンターが相互にその特色を生かし合いながら学びあい、さらにつながりあうことで、赤ちゃんをめぐる人の輪も世代を超えて拡張していくことが大切であるだろう。ヒトの最初期の研究の輪は、ヒトの生涯にわたる根幹をなす研究領域である。他分野の方々と赤ちゃんの学術の話をすると、未来への希望を生み出す学だと言われる。その希望の学を照らす雑誌として、BABLABもまた誕生創刊号から、すでにしっかりと足取りで歩き出しているが、大きく育っていくことを大いに期待したい。知のアゴラの文化的象徴に、この雑誌がなっていくことを楽しみにしたい。

